なゆたな

九条

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なゆたな

【Ｎコード】
Ｎ５６８０Ｉ

【作者名】
九条

【あらすじ】
いつも一番に登校してくるやつがいる。
背が小さくて、無口で、以外と調子がいい奴。

いっこめ

最近、いつもやってる習慣がある。

「おはよう」

朝の教室、窓際に座ってる奴に挨拶する。

「おは」

青い小さなネットブックから顔を上げずに、返事が返る。

2番目に登校し、鞄を置いて、左斜め前の窓際の席の奴に挨拶し、机に突っ伏して、カタカタとキーを打つ音を聞きながらぼーとしながら3番目に登校する奴を待つ。

戸越マナ
―クラスで一番低い身長
―グレープフルーツジュース
―青いネットブック
―短い髪
―少ない口数
―いない友達
―左をブラブラさせる癖

「とう！」

「うわっ」

武道場の半面、空手部の領域の端で正拳突きを始めたところで、四股立ちした太股に後ろから飛び乗られた。

「何してんだよ」

「重し役、いつも後輩にやってんじゃん」

武道場の反対側を見るが剣道部の連中は自由時間らしくユキの行動を咎める事はなさそうだ。

（空手部の連中の目は痛いけど）

「———たく」

「最近、噂だよ」

「何が？」

「狩塚ヒジリ君が戸越マナちゃんを見る目が最近イヤラシイって」

正拳突きをする手が止まる。

「……誰が言ってんの？」

「クラスの女子他多数」

「……」

正拳突きを再開する。

「興味あるなら話かけてみれば？」

「――――何でだよ」

『好きなんでしょ？』と、からかわれるかと思ったが、言葉を選んでいるようでしばらく黙りこむ。

「マナってさ、いつも一人でしょ」

確かに、受け答えはするが、特定の誰かとツルんでいるところを見た事がない。

「壁作ってるって訳じゃないけど、単に他人に興味無いんだよねあの子」

真剣な表情から一転、ニヤッと笑みを浮かべる。

「だから、外部から入力したらどうかなっと、ウィズ男子」

「……お節介だな」

「それが御堂さんクオリティ！」

突きの練習をやめて、深くため息をつく。

「『告れ』とか言わないのか？」

「え、するなら止めないけど無理だと思うよ？」

――――さいですか。

最近、いつもやってる習慣がある。

「なあ、何やってんだ？」

「下位次元上生物死亡現象を上位次元から観察した場合の情動に関する考察」

「――――マジで？」

「ウソぽん」

２番目に登校し、鞄を置いて、左斜め前の窓際の席の奴に挨拶し、机に突っ伏して、カタカタとキーを打つ音を聞きながらぼーとしながら――――。

にこめ

「精神はソフト、肉体はハードと定義するなら、魂の意味とは何なのだろうか。人間と同じ育成経験を経てソフトを構成し、人間と同じ構成物質でハードを構成された人造人間が人間と定義されない場合。魂の非在をどのようにし証明できるのか」

完全下校時刻にはまだ遠いが、もうすでに夕日が差し込む放課後の図書館。客足がない事をいいことにカウンターに本を積み重ね、上月マキナは自分の研究をおこなっていた。

読んでいた本を逆さにおきながら、今の要点をノートに書き写す。中二病なのは自覚するが、学校の授業よりよほど有意義だ。

ふと、気配を感じ顔をあげる。

「……」

戸越マナが何か言いたげに立っていた。

「何か用か？」

「……それ」

返却された本を指差すマナ。

「借りたいのか？」

「……うん」

本と貸出カードをマナに渡すマキナ。

「珍しいな、こういう本借りるの」

「勧められたから」

はにかむマナ。

輝かしい青春を送ってるようで結構なことだ。

下校時刻になり戸締りをして図書室をはなれるマキナ。

マキナが夕方の廊下を歩いていると部活帰らしく空手着を背負った狩塚ヒジリが武道場の方から歩いてくる。

「よう、3股男」
「戸越のカレシか」
「――ぶっ！、ち、違う！」
「何だ、違うのか」
「誰がそんなこと言ってたんだよ・・・・」
「ん、ユキの奴が触れ回っていたぞ」
「ゆき～」
「――マキナ君」
やわらかい声が話に割り込んでくる。
ウェーブがかかった色素の薄い長い髪、低い身長、上級生を示すシャツの襟章。
――倉笹セリナ先輩。
「……」
「あ、ちわーす先輩」
「こんばんは狩塚君。マキナ君、ご返事は？」
可愛らしく笑みで首をかしげる先輩。
「……こんばんは倉笹先輩、何か御用ですか？」
苦々しく返事を返す。
「あなた達は何していたのかしら？」
「ただの雑談ですが」
「なら、用が無くても御一緒してもよろしいのではありませんか？」
「……」

昇降口に到着すると、セリナはマキナに向き直る。
「それではマキナ君、職員室に用があるので私はこれで失礼しますね」
そういうとメモ帳を取り出し内容を確認すると。トテトテトテという擬音が似合いそうな歩調でマキナに近づくと、ぎゅっとマキナの手を握りしめる。
「ああ、また明日。先輩」

「なあさっき先輩が見てたメモってなんだろうな」
先輩の姿が廊下に消えるとヒジリは口を開く。
「ああ、あれは――――」
言うかどうか迷い、さらに言葉に迷うが重重しく口を開く。
「――――攻略メモだ」
「攻略メモ？」
「片思いの相手を落とすための攻略法」
「お前それって……」
あきれたように見やるヒジリを無視し、昇降口に向かうマキナ。
「つか、何で知ってるワケ？」
「あのメモ作ったのが俺だからだ」
倉笹先輩から――されたため自分の研究の成果を試しに出力してみたのだ。
「お前色々……サイアクだな」
「全くもってそう思うが、責任をとらないほうが最低だろ」
「あん？」

次の日の昼休み5分で昼飯を終えた後屋上に出る。毎日の校舎を散歩する奇習があるのだが、屋上の様子がいつも違っている。
「あ」
「……」
女子生徒が一人、男子生徒が一人こっちを見ていた――――というか片方は睨みつけてきた。
「じゃあ、倉笹さん返事はまた今度」
まわれ右して屋上から出ようとしたが、それより早く男の方がこちらに近づいてくる。仕方なく道をゆずり。そのままフェンス傍までいき埃を払いベンチに腰掛ける。
残された女子生徒はマキナの隣に腰掛け、顔を覗き込んでくる。
「なにも言わないのですか？」

「屋上で告白なんて、漫画みたいな事するやついるんだな」
拗ねたようにむくれる倉笹先輩。その後に続く言葉もなく、二人並んでフェンスの向こうの風景を眺める。
「最初に会ったのも、こんな日でしたね」
「最初に会ったのは、冬の雨の日で放課後の図書室だったが」
「……情緒が無いですね」
そうして再び訪れる沈黙。
ゆったりと流れる空気の中、倉笹先輩の言葉が呼び水となって古くもない記憶が呼び戻される。

誰もいない図書室
座り込んだ先輩
罵倒する言葉
拒絶する泣き顔

――――だから私は対価を捧げます

「――――契約します」
不意に倉笹先輩が呟く、その姿があの時と重なる。

俺は他人には関わらない。
自分の行動に責任にがとれない。
他人を背負う勇気がない。
自分は自分の無能からいずれ破滅する。
自分の破滅に巻き込んで他人まで破滅させる事は許せない。

だから、なぜ与えてしまったのだろう。自分の弱い感情を切り離し知識と行動を提供する。その儀式を、許しを。

「履行する」

さんこめ

「先輩」
マキナは六限の授業が終わっても全く起きる気配がない御鎚レキに一撃を加え、明日提出のレポートを写そうと迫る狩塚ヒジリを回避し、教室を出たところで聞こえるギリギリの音量で呼び掛けられる。
振り返ると小さな身長と、短い髪をもつ後輩七菅ネイがじーとこちらを見ていた。
「活動日なので迎えにきました」
そう独り言のにように囁くと、さっさと歩き始める。言われて木曜日だという事を思い出す。木曜日は文芸部の活動日だ。
教室棟を離れ、実習棟の方に向かうと人気が無くなってくる。ほとんどの部活は職員室や視聴覚室などがある特別教室棟に部室があるが、文芸部だけは科学技術棟の二階に存在する。図書室からも遠くかなり使いにくい。
「先輩」
「なんだ？」
こちらを呼びかけながら、歩む速度を変えない。七菅がなんとなく不機嫌な空気を放出しているのは普段空気が読めないマキナでもわかる。
「最近――――」
しばらく口ごもったネイが口を開こうとした時、背後からダッダッダッと騒がしい音が近づいてくる。
背後の敵性存在の正体を悟り、身をかわそうと足を踏み出し掛けて気づく。このままだと後ろの猿がネイにぶつかる。
マキナはため息をつくと、身構える。
「とぉーーーー！！」
奇声を上げ飛びかかる猿を振り返り様に空中で捕獲する。正面か

ら抱きしめることになるが恋人同士のような美しい絵図ではなく。たとえて言うなら5歳児の突進を父親が受け止めるシーンに似ている。
「いいかげん、出会い頭に馬鹿やる癖は直らんのか？」
ため息をつくと、猿こと五瀬ユキを床に下ろす。顔でもぶつけたのか、しばらく両頬をおさえうつむいたまま硬直していたユキだが、全く反省の無い笑顔で顔をあげる。
「ういっす、どこ行こうとしてたの？」
「部活だ――うぉ！」
「先輩、行きましょう」
ネイに腕を引っ張られる。先ほどよりさらに不機嫌になっているようだ。
「おー、見せつけちゃってくれるね」
冷やかすユキの声を後ろに聞きながら、部室まで引きずられていった。

更新分を読み終わり、古いＢ５のノートＰＣから顔を上げる。
「三話目からいきなり展開も書き方も変わったな」
かけていたメガネを外しながらマキナは感想を漏らす。
「一話目、二話目で無理していた感じはありましたから、この作者とらしいと言えます」
ネイがノートＰＣから目を離さず、マキナの感想に応じる。
「キャラも増えたね、いかにも萌えって感じで」
「……いつまでいる？」
「おかまいなく♪」
机２つと椅子３つ、それに本棚だけで敷面積ギリギリの物置のような文芸部の部室。本棚の前のいつもなら部長が座ってる席に図々しくも居座ってるユキ。

「そういえばさぁ、マキナ」
「何だ？」
正直鬱陶しいが、相手にしないとさらに鬱陶しいことを長年の経験で知り尽くしており。ため息と共にユキに向き直る。
ネイは相手にしない事を決めたのか、自分の執筆作業を行っているようで、カタカタとタイピンング音か響く。
「笹倉先輩と付き合ってるの？」
タイピング音がピタリと止まる。
逃げるように二人から視線を外すマキナ。
「……」
「……」
が、無言の圧力は時間と共に高まっていく。
「付き合ってない」
吐き出すように返事する。
「登下校も、お昼も一緒なのに？」
「……ああ」
「ふぅん」
ユキは明らかに納得してない様子で、じとっとした視線を浴びせる。
「資料を取ってきます」
席を立ち部室を出ていくネイ。
部室の扉が閉じると共に弛緩する場の空気。
椅子によりかかると、ふと先日の事を思い出す。
「この前、ヒジリの奴が俺を三股扱いしていたがお前が犯人か？」
「え、三人目増やしたの？」
「……そんな訳あるか」
「そういえば、ヒジリ君って……戸越さんと進むと思う」
「いいや、友達止まりだろ」
目を閉じ一旦間を置く。
「戸越は他人に興味が無い、他人の言動を刺激として受け取る閾値

が高い。ヒジリは普通だその閾値を超えられない。超えたとしても重い思いを受け取れるほど、戸越も強くない。異性として意識しても異性という記号としかヒジリの事を認識しない。ゆえに友達止まりで終わる」

途中から持論を語るのが恥ずかしく早口になった。が意外な事にユキは真剣な表情で聞きいて入っていた。

「戸越さんの事よく見てるじゃない、もしかして三人目って戸越さん？」

「違う」

図書室には死体がいた。

放課後の返本作業。今日いくつかのクラスで授業に使ったのか大量の辞書がケース単位で返却されていたため、それらをカートにのせて奥のコーナーに入った所、そこで伸びている死体を見つけた。

「なにをしているんですか？」

セリナは本が満載されたカートを後退させながら、あやうく物理的に礫死体にしそうだった死体に声をかける。

「……ちょっと自己嫌悪を」

死体こと狩塚ヒジリはこちらに顔を向けるとそう言った。

「はあ？」

進路妨害になってることに気付いたか、ヒジリはむくりと起き上がる。

「手伝います」

「ありがたいですけど、部活は？」

「今日は休みなんで」

「はぁ、そうですか」

ヒジリが高い所の本を、セリナが低い所の本を担当し返却作業を始めた。しばらくは黙々と作業を行っていたが、全体の３分の２ほ

ど終了した頃、不意にヒジリが口を開く。
「そういえば」
「はい」
セリナは作業を続けながら応じる。
「よく言うこと聞かせられましたね、あいつまず人の頼みは断ることから始めるのに」
「ああ」
何のことか合点がいき、思わず笑みがこぼれる。
「今回はタイミングの勝利ですね」
「タイミング……ああ、告白シーンに遭遇ってなんつーか漫画みたいな偶然っすね。あいつ生々しい感情に弱いからそれで動揺したところをたたみかけてって感じですか」
ヒジリはマキナが慌てふためく様子でも想像したのか愉快そうに笑っている。
しかしそこまで話したのですか、マキナ君にはお仕置きが必要のようですね。
「そこまで偶然でもないですよ。マキナ君は昼休みの散歩ルートは特別教室棟2階から実習棟を回るルート、特別教室棟を上から下まで巡回して図書室に行くルート、体育館を回るルート、教室棟を1階まで降りてランダムで行動するルートの4つですが。月曜日の体育館は人が多いのでそのルートに行くことはありません。図書館に行くルートの場合屋上に出るのは時間がランダムしますが、その他のルートの場合5分前後の誤差はありますがだいたい同じ時間に屋上に来ます」
ヒジリが苦笑を張り付けた表情でセリナを振り向く。
「……先輩、それって」
セリナはにっこりと笑みを浮かべ。図書室の入り口の方を向く。
「私が一番不利な立場にいるのですから積極的に攻めないと。それくらい許してくれませんか？」
そこには不機嫌そうな七菅ネイが立っていた。

下校時間が近づいてきたため、部室に居座ろうとする猿を追い出し部室の鍵を返却。結局ネイは戻らず、『帰宅します』とネイらしい短い文面でメールが来た。
セリナとの待ち合わせの場所である昇降口前の巨大な絵画の前へと急ぐと、帰り仕度をしたセリナと何故か帰宅したはずのネイがいた。……正直、回れ右して見なかったことにしたかった。
「こんばんは、マキナ君」
セリナ先輩が挨拶してくる。笑顔が怖かった。
「……」
ネイがこちらをじーとみている。無表情が怖い。
「……こんばんは」
二人に気押されながらなんとかそれだけ絞り出す。
3人して沈黙していると、珍しくネイが話を切り出す。
「先輩、一緒に帰っていいですか？」
「……あ、ああ」
つい反射的に返事してしまい、慌ててセリナ先輩を見る。
「いいんじゃないんですか」
と、なぜかにっこりと笑う。
「そ、そうか。それじゃあ帰りますか」
セリナ先輩に微笑まれて反射的に笑う、セリナ先輩の笑みが意味深に見えたのは心理的要因だろうか。
「はい」
「……はい」
苦行は30分ほど続いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5680i/

なゆたな

2011年2月1日03時44分発行